

朝韓中の抗日と大日本帝国の瓦解（五）

駁逆の明治維新 — 大日本帝国植民地主義の系譜 —

北島 平一郎

大阪経済法科大学研究補助金による論文第五号

目次

第一章 神功皇后

神功皇后の実像、虚像

神功皇后の三韓征伐

朝韓中日の朝鮮半島逐鹿戦

日本の敗戦、民族主義と記紀の成立

好太王碑

第二章 世界植民地主義と神功皇后観

教科書の神功皇后

日本植民地主義の払拭

説

第三章

桃太郎

桃太郎お伽噺

桃太郎と世界植民地主義

詰桃太郎発端話説 山東京伝

桃太郎主義の教育

論

第四章

排外思想といじめ

山田の案山子

釣女

第五章

むすび

神功皇后説話

桃太郎譚と忠臣蔵

附記

第一章 神功皇后

神功皇后の実像、虚像

ここでとりあげるのは、大日本帝国の植民地主義の精神構造である。そのエッセンスは日本の隣国朝鮮中の侵畧植

民地化を推進する日本人の心である。これは古代いや神代からあつて一九四五年までつづきその後は潜在化して依然として人々の心にすくつてゐる。そのルーツは三個あつて、神功皇后伝説と桃太郎伝説、西郷隆盛の征韓論である。勿論、和寇、豊臣秀吉の朝鮮侵略等は日本の朝鮮侵略史であるが、これらはここでは問題としてとりあげない。

神功皇后であるが、これも人物や事蹟等につき実説虚説とびかつて議論紛々として定まらない。しかしその眞実をこの論文で解明することを試みるということではない。神功皇后の伝説として日本でいまいつた年代から人々が信じている説話を解釈して植民地主義思考として意義づけたいといふのである。それがこの論文の目的である。桃太郎伝説、西郷の征韓論共に同断である。

神功皇后の実在は、一九四五年まで疑はれることはなかつた。人々は天皇二二六代の中で同皇后を女帝、或いは皇后、摂政として位置づけ、彼女は実存として生き亡じたとしていた。一二六代中特に有名で知らぬものはない。神武天皇、明治天皇と比肩する。それが問題である。そこに日本植民地主義の一つの根源がある。戦後は、様相はガラリとかわり皇后の実在を否定する論が続々あらはれた。もつとも日本国史研究の中で神功皇后を論じたものは各年代、種々あり、一概にすべてが肯定的ではなかつたと言えないこともないが、例えば有名な東京大学の池内宏博士の神功皇后論は、早くからその実在の否定（朝鮮侵略は到底史上の事実とは考えられぬ、後人の添加）を主張していた。しかし彼は慎重を期しその論文発表は太平洋戦後の昭和二年八月であつた。（日本上代史の一研究―日鮮の交渉と日本書紀）、これと同じく神功皇后の実在を否定する学者があり、それが有名な津田左右吉博士である。そしてその発表は大正二年、「神代史の研究」、大正八年「古事記及日本書紀の新研究」であつた。時節柄当然これは大物議をかもした。これらの論文は主として神功皇后の朝鮮侵略を事実にあらずと否定するものであり、神功皇后の実在そのも

のを否定するものではないと言えなくもない。しかし同皇后に関する歴史上の事実として青史にあげられているものは日鮮関係が主で他は行事的なもの、応神天皇の立太子ぐらいと考えて大過ない。そこでいきおい神功皇后の征朝鮮論を否定するということは、同皇后の事蹟すべてを否定することとなり、ひいてこれは同皇后の实在を否定することとなると考えられる。同皇后は青史によれば仲哀天皇崩御の翌二〇一年一〇月に摂政となって二六九年四月一七日までそのまま在位していたということになっている。この六八年間をうめる研究というものはない。神功皇后实在、非实在ということになるとこの六八年間を如何に取扱うかということとなる。ここではこの問題に踏込まないことは前言のとおりである。

神功皇后と三韓征伐

神功皇后の朝鮮侵畧を否定するのはこれらの人々の主張から次の論據による。神功皇后の説話は古事記(七二二年正月、太安麻呂によって元明(女帝)天皇にたてまつられた)、日本書紀(七二〇年五月、舍人親王によって元正(女帝)天皇にたてまつられた)の記事によって語られているが否定の第一は神功皇后が朝鮮を攻畧するのは、神のおつげによって三韓の存在を知ったことによる、とある。しかしそれは虚構である。即ちかくの如く同皇后が海外に国があることを知らなかったというのには信じられない。同皇后に関しなくても日本人が海外の国を知り、それと交通したのは文献の上からも一世紀前後からである。神の摂理と指向によって神功皇后の三韓攻畧が行はれたと主張する為にするこの物語はフィクションである。第二、皇后の半島攻畧軍は、どの地点で朝鮮半島に上陸し、どの道を進んだの

かが不明である。即ち進軍の道筋が全然のべられていない。また当時有名であった日本の半島支配地であった任那のことがすこしも出てこない。日本の攻畧軍が眞に半島にせめこんだのなら、当然この任那のことが、根據地として又連絡地として出てこなければならぬのにそれが無い。以上のことから神功皇后の三韓攻畧などなかったと断じなければならぬ。又具体的な戦闘の記述等なにもない。

書紀に出てくる「阿利那礼河」は阿利河で、白頭山節に「白頭御山につもりし雪はとけて流れてアリナレの可愛い岐生^{キサシ}の化粧の水、というのがあつて、京城附近を流れる漢江のことである。このとき皇后が攻めた新羅王は、皇后に調を永く貢ぐと約束し、誓つて、アリナレ河が逆に流れ、河の石が上つて星とならない限りこれを破ることはない、といったと言うが新羅王が百済の河であるアリナレを誓言の中で言及することはないから、この話も全く虚言である。こうして否定説は種々の根據をあげて神功皇后三韓攻畧を虚構と断じる。

その他否定説は、神功皇后の軍隊の將兵の編成や名、数等なにも語られていない、またこの新羅王の名をハサムキンとしているが、この王は伝説時代の空想の人物であつたこと、この王が人質として差し出したというミシコチハトリカンキは、その生存の時代が違うこと等をも強く主張している。『神功皇后』、神功皇后論文集刊行会編、皇学館大学出版部、昭和四七年。『神功皇后』、岡本堅次著、吉川弘文館、昭和四二年四版。『神功皇后』、肥後和男、弘文堂、昭和三二年。

朝鮮中日の朝鮮半島逐鹿戦

これらの否定説をも考慮に入れて、神功皇后の三韓攻畧を考えると、そのことがなかったとしても日本の朝鮮進出そのものは、早くからあり、すでに四世紀にはその支配地任那の存在があるとされる。任那が何時からどの様にして日本人の住居するところとなったのかはその経過明瞭でないとしても、その地には早くから日本人が渡って朝鮮の人々と混住し、そのうち朝鮮の地に夫々高句麗(半島北方)、馬韓(忠清、全羅北道)、辰韓(慶尚道)、弁韓(任那の前名地域、馬韓、辰韓には含まれた南端地)が起つて、これらの地方が馬韓から百済が、辰韓から新羅がまたまた更に勃興すると共に弁韓が任那になったと考えられるのである。

そして四世紀後半頃、こうして建国された高句麗、新羅、百済、任那が対立して夫々威を張り半島の逐鹿戦が漸く激しさを加えて来て日本も任那を根據地としてこれらに参入する。この間高句麗は大いに勢威をはって新羅、百済はそれから圧迫された。尚更にこの両国は南方から任那を通じて北上してきた日本にも脅威され百済は日本と新羅は高句麗と好を通じる。ここから神功皇后の伝説が記紀の年代より約一二〇年(干支二運り)^{フタメグ}おかれて事実上の日本の朝鮮侵入として現実味を帯びる。しかし勿論これは神功皇后が朝鮮を攻畧してそこを支配したという様なことではない。日本がこの時期新羅に圧迫を加えて己巳の年(三六九年)壬午の年(三八二年)にそこへ軍をさしむけたという記録がある。このとき高句麗の好太王は大いに百済を攻めてここを攻畧することに成功した。即ち好太王は三九六年に百済の五八城・七〇〇村を没収、百済阿華王の王弟、大臣一〇人を俘虜とした。阿華王は生口一〇〇〇人その他を献じて永く「奴客」となることを誓った。その後百済はこの誓を破つて日本に接近するが、新羅は日本の圧迫を脱する為に好太王にたすけを求め、好太王は四〇〇年兵を出して日本軍と戦い、これを任那か加羅まで追い落とすとある。

日本の敗戦、民族主義と記紀の成立

これが当時の朝鮮半島の史実とされる。神功皇后の伝説はこのときの史実をふまえてこれを日本の侵襲成功の話にし、日本人がちの理想談としたものと考えられ、神功皇后三韓攻畧の説話はそう考えるのが最も妥当な解釈と思はれる（これにつき更に後にふれる）。日本征服の主人公を女性としたことは、次の理由が推測される。

一、神功皇后を比定したのは、古事記、日本書紀であるが、夫々たてまつられたのは元明帝（四三代）、元正帝（四四代）であり、共に女帝である。これら女帝の權威をたかめる為には征服の皇威振興の立役者として女后をかりてくることは大いに意義あることであった。

二、持統天皇（女帝、四一代）のとき同帝の權威をたかめる為、天照皇大神が男神から女神へと轉換され、外宮の豊受大神も共に女神となった。女帝のはじめは推古天皇（三三代）であるが、持統天皇のとき大いに女権の伸張がはかられかく如き次第となり、あはせて天照皇大神は最高神となった。これを受けて古事記、日本書紀は（一）にのべた如き舉に出たと考えられる。

三、一般的に母系社会、母権社会の系譜が語られるが、女性は古代生産の生みの親である。即ち生産力である人口を生産出来るのは女性のみであり、ここに女性の珍重、崇拜があった。この期女帝は推古（三三代）、皇極（三五代）、齋明（三七代）、皇極帝重祚、持統（四一代）、元明（四三代）、元正（四四代）、孝謙（四六代）、稱徳（四八代）、孝謙帝重祚の六名八代であった。後には明正（二〇九代）、後櫻町（一一七代）の二帝がある。

四、年代を二二〇年さかのぼらせたことは今上女帝のイメージをはばかったことと、国史の悠久性を強調すること

説に意図があった、と考えられる。

論

五、最後に最も重要なことは、神功皇后説話は元明、元正兩女帝の皇權伸張の爲であつたが、更にそれは日本民族主義の観点から造成されたものと考えられることである。民族主義は国内的には統一、融合の理論と対外的には独立、國權拡張の爲の理論であり（これについては、稿を改めて論じる）、分裂主義の革命の理論の反対概念であるが、このとき日本としては、対外的には独立、國權拡大の思想的バック・ボーンを必要とした。それは、日本が六六三年南韓の白村江で唐・新羅連合軍に破れ（この期の朝鮮半島逐鹿戦の一つの結論としての戦い）、半島から日本軍全隊と勢力圏を引払うという事態が生じ、天智天皇はその敗戦の善后策として九州から大和にいたる要素所に山城を防衛の爲にもうけ、所々にのろしを設置して唐・新羅連合軍の進攻にそなえたということがあつた。天皇は、連合軍の日本侵寇を必至と考えたのである。即ち唐・新羅連合軍は六六〇年に百済を亡ぼし、六六八年には高句麗をも亡ぼすこととなる当時の一大征服連合軍で天智天皇はこれに一大脅威を感じたのも宜なるかなと思える。天皇の情報キャッチが素早かつたのであろう。その築城の一つが生駒山上に築かれたといわれる高安城で大阪経済法科大学の裏山にあたるが、その实在をめぐつて種々の探索が行われている。

そしてその上、天皇は戦勢を非と予見した。当時唐・新羅連合軍の力は強大で三年前の六六〇年の日本の興党であつた百済の滅亡をみて、それやこれやで天智天皇は都を大津にうつしたのである。百済滅亡で百済国人は日本をたよつて流入し、六六五年には天皇は男女四百人を近江に、翌年には二千人を東国に居住させている。その間彼等の手で筑紫に城塞を築かせている。天皇は日本防衛線が連合軍に突破されると想定し、近江の大津に遷都を断行したのであつた。当時の国難来とする緊迫した情勢をみるべきである。大津は琵琶湖の大うみを前面にひかえ、水路を通つて

北陸、中部へ容易に達しられると計算したと考えられる。舟をすべて押えればすくなくとも連合軍は水路によって進攻不可能の筈であった。時をかせいで日本諸国応じて反撃に出ようというのである。幸い侵寇のことは無く、天武天皇六七三年に都は大和にかえり、飛鳥浄御原宮が営まれた。朝鮮中の日本本土侵攻という史実は絶えてない。

ここに日本敗戦の汚辱を払拭する国家的精神的民族国家事業が必要となり、敗戦に半世紀を経て古事記、日本書紀があまれることとなった。これが記紀成立の大原因であった。日本が朝鮮唐に破れて朝鮮半島から追い落とされたという如き卑史は抹殺し、日本の国威を海外に振起した歴史が必要であった。こう書けば分明である。ここに元明、元正両女帝にあやかつて女性の神性を帯びた一大英雄が必要であった。そして記紀の作者はこれを神功皇后に比定し、これが皇后三韓に雄飛してこれを征服し、日本国威を海外にいや輝やかしたという物語りとなった。これと国内の大和政府が出雲の国を大和の精神を以て融和併合したという物語りと相まって、大いに日本讃仰、民族主義振興の一大叙事史デモンストレーションとなったのであった。神功皇后は、当時のこの民族主義的精神作興の波の中から出現したのであった。

好太王碑

好太王碑という歴史的モニュメントが朝中国境ヤール川畔にある。これは七メートルに及ぶ大石碑で好太王の長子長寿王の建立にかかる。趣旨は勿論子として偉大であった英雄王の事蹟をたたえる記念碑である。そこには父王の業績が戦争の勝利を主として種々刻みこまれている。これが日本で大いに問題となっている。それはこの碑が日本の

説 南韓支配と好太王の高句麗軍を討破つたと讀める碑であるということからである。その肯定、否定またそのななめの解釈をめぐつて議論百出してゐる。微に入り細をうがつて文献、汗牛充棟ただならずという趣である。その精緻な解釈、考證立論は敬服の他はない。魏志倭人伝と同様、対象がせいぜい書物二、三頁分にもみたくないもので、この意味で研究は万戸に門を開いている。その否定は碑は長年の歲月による剥落のほかに明治時代の日本軍人による碑の改削があつて碑文の讀み方がまげられ、日本勝利の記録と讀まれ得る様になつたが、碑の正しい意味は好太王が侵入してきた日本軍と百濟軍とを共に打破りこれを南韓に追い落とすと讀めるのであり、それが、碑文削除をのぞいた眞の碑の文章である、といふのである。

ここでは碑文の剥落、削除の精密な議論には参入しないが、一般論として考えれば、

① 王朝が確立しているとき自国の大王の事蹟、その他を敗亡の記録として残すことなどあり得ない。

② 世には悲史があり、また国家滅亡の叙事史も多いが、それは国亡びて山河あり、後代の人々が、民族の悲泣史として往時を回顧して編むものである。本来キリスト教の旧約聖書がそうであり、またユダヤ民族のバビロンの俘囚、ジエロット (Zealots) の六六年 A・D・から七〇年 A・D・にかけてのローマの専制に抗してマサダ (Masada, Fort in Judean Wilderness) に最后、尽殺された歴史等はその有名なものである。

③ 王朝盛時にあつて敗北の記録を省みることなどあり得ない。それでは王朝がモニュメント等たてている力と安泰がないことになり、王朝盛時ではあり得ない筈である。王朝が盛時であり、それを培つたものは、勝利につぐ勝利でなければならぬ。

以上の理由から言う迄もなく好太王碑は、その論、否定こそが正鵠を得ている。

このときの朝鮮中日の朝鮮半島勢力争いは、いまもふれた天智天皇の六六三年白村江敗北でこの期のピリオドがうたれる。日本の朝鮮半島よりの敗北撤退である。これが歴史の事実である。

ちなみに言えば、このときつくられた所謂古代山城であるが、対馬の金田城、九州の北部怡土城、鞠智城他三方所、下関の長門城、瀬戸内海中部の常城、四国香川県の屋島城、城山城、そして高安城が記録されている。最後の高安城が幻のそれといわれその実在が種々考證、研究されている。

これからみて天智天皇が、眞底本気で唐・新羅連合軍の日本来寇を考え、これに眞剣に対峙していたことがわかる。この点杞憂であつて結果的に幸いであつたが、流石天智天皇は大陸、朝鮮半島に効率的な情報網をしいていたことが感得される。

第二章 世界植民地主義と神功皇后觀

教科書の神功皇后

ここまでみたところ神功皇后にまつわる諸々の説話は歴史的現実からは程遠いことがわかつた。しかし皇后の事蹟があまねく日本に知れわたつていて、という事実は否定し得べくもなくその点については充分の考慮が払はれてしかるべきである。いまここにその伝説の内容をうつつしてみよう。最もよく簡を得て言はんとするところをまとめてみると

思はれるものは左の如し。(これは国定教科書、尋常小学国史上巻、大正九(一九二〇)年二月発行)

神功皇后

仲哀天皇の皇后を神功皇后と申し、御生れつき賢くおおしくましませり。天皇の御代に熊襲またそむきしかば、天皇は皇后と共に九州にみゆきして之を討ちたまいしが、いまだ平がざるうちにかくれたまへり。

此頃朝鮮には新羅、百濟、高麗の三国ありて、之を三韓といへり。中にも新羅は最も我国に近く、且その勢強かりき。されば皇后は、まづ新羅をしたがへなば熊襲はおのづから平がんとおぼしめし、武内宿禰とはかり、御みづから兵をひきいて新羅をうちたまう。時に紀元八百六十年なり。中畧

皇后舟いくさをひきいて対馬にわたり、それより新羅におしよせたまう。軍船海にみちみちて御勢すこぶる盛なりしかば、新羅王大いに恐れていはく「東の方に日本という神国ありて、天皇というすぐれたる君いますと聞く。今来れるは必ず日本の神兵ならん。いかでかふせぎ得べき」とただちに白旗をあげて降参し、皇后の御前にちかいて「たとい太陽西より出て、川の水さかさまに流るる時ありとも、毎年の貢はおこたり申さじ」といへり。

やがて皇后凱旋したまいしが、其后百濟、高麗の二国もまた我が国にしたがへり。下畧

こうしてこの后王仁博士の来日、機織、鍛冶などの技師、織工の渡来がつづき、これはすべて神功皇后の三韓征伐とその御徳の大なるによる、という風によるのである。この文章は古来よりの神功伝説を勘案、集約したものであるが、歴史的事実を全くまげて無視し日本国民の希望的朝韓中日関係をのべている。このことは本文第一章中みだしの「朝韓中日の半島逐鹿戦」をみれば分明であるが、ここで大事な事は日本は朝韓中に対して早くからこの物語りの様な状況の展開することを望んでいたと考えられることである。神功皇后伝説の起源である記紀出現の年よりこ

の大正九年まで実に一千二〇〇年、この間連綿としてこの伝説はつづいてきた。それは上代の神功皇后觀、中世、近世ととぎれることなく継続してきたのである。このことを矢張り我々日本人は無視してはならない。世界はバスコダガマ (Vasco da Gama) 、コロンブス (C. Columbus) 、マゼラン (F. Magellan) 等、一五世紀、一六世紀より近世植民地主義の洗礼を受けて一九四五年までそれは継続した。スペイン、ポルトガルは彼等の開拓につづいて世界を植民地化し、それは南北アメリカ、アフリカ、インド、東南アジアと広がった。その後オランダが同様に進出し、英国、フランスがこれにつづいて、そして民族国家統一運動の勃興と共に更にこれにドイツ、イタリア、日本が加わつてここに於て世界はほぼこれらの国々に分割されてしまったのである。

それがなにを意味し、どの様な悲惨を被植民地、その地域の人々にバラまいたかは、ここにことごとしくあげつらうまでもない。この実行は一九四五年第二次世界大戦の終熄と共に一応やむが、その為には、人類は第一、第二大戦という未曾有の大災厄を地上に課し、犠牲に犠牲をうんで苦しみぬかねばならなかった。この植民地主義の災厄、その払拭の為の大被害を我々人類は再びくりかえしてはならない。

日本植民地主義の払拭

ここに我々日本人としては、その対朝鮮中植民地主義の淵源をたずねそのよつてきたところを明確にし、該思想の払拭を心がけねばならない。

しかしこれは中々困難なことである。至難のわざといつても過言ではないかも知れない。即ち神功皇后は、はじめ

から神に導かれた英傑女王として描かれているが、かれは神そのものとなつていつきまつられているからである。これは日本の天皇、貴族はすべて神となつて祀られる風習であり、近くは明治神宮があるが、神功皇后は、公稱摂政である皇后であつたが、神格化されている。日本は多神教で、八百萬神が存在しているとされるが、これを祀る神社は八万社といわれる。そしてそのうち二万五千社にのぼる社が神功皇后を直接の祭神とするのである。日本神道については先にふれるところもあつたが、これは日本の宗教として日本人の心にすみついている。そして神功皇后の絵馬がまた全国的に普及し、各神社の絵馬堂にかかげられてきた。神功皇后が髪を男髪のみずらに結び、直立してそばに武内宿彌が折しきしてうづくまつている。絵柄によつては嬰兒であつた応神天皇を彼が膝に抱いている。これが所謂神功皇后のトレードマークである。この絵は絵馬だけでなくそのときどきに一九四五年まで、本の挿絵となり、またパンフレットとなつて流布した。神、皇后のイメージは強い。日本人は意識するとしないとに不拘、皇后を崇拜し、礼拝している。

この春（一九九八年）筆者は戊辰戦役跡探究の為、城南宮（京都市伏見区中書島）と御香宮（京都市伏見区桃山）をたずねたが、たまたま訪れた両神社共に神功皇后を主祭神としてその鎮座は共に上古にさかのぼり、京都皇宮（御所）守護の役目を果されているという。御香宮の石庭家屋の玄門口には、例の神功皇后の絵が大きなたつたてとなつて、たてられていた。またこれもたまたま訪れた洛北の三宅八幡宮では、絵馬堂に皇后の絵馬が奉納されていた。余程古いときにかざられたらしく彩色ははげおちて、白い影だけがそれと判じられた。嚴重に針金の網でかこはれてた。

神功皇后に関するイメージは右の如くである。神功皇后が神に導かれて朝韓に押し渡るといふ古事記、日本書紀の

説話から、神功皇后が自ら神となつていままた如く日本全国にまつられている。この信仰対象となつた神功皇后像はこれを否定し、信仰の対象からはずすことはこと宗教の問題である限り不可能である。神功皇后は征服王であり、植民地主義者であるから神として祀ることは不相応しくないといつてみてもそれは理屈であつて宗教には通じない。そこで三韓征伐のいまわしい説話を払拭する為には、①神功皇后とそれを生み出した説話を日本最初の民族主義の所産である一篇の叙事詩であると位置づけ、その朝鮮侵略譚の虚偽であることを明らかにすることである。記紀の神功皇后篇は即ちホーマー (Homerus) のトロイ戦争をうたった *Ilyad and Odysse* (700 BC) や、旧約聖書のモーゼ (Moses) の出エジプト記 (*The Exodus from Egypt*) 等と同じく内容は全く異質だがその趣旨は同一であると説明することである。即ちトロイ戦争 (*Troyan War*) ではトロイ王 *Priam* の息子の *Paris* がギリシャ王 *Menelaus* の妻で世に絶世の美女と聞えた *Helen* をさらうことから起るといったこと、又トロイの木馬 (*Troyan Horse*) の話等、更にモーゼがエジプトを逃れてスエズ海峡に至り、エジプト軍隊の追撃を受け海を二分して道が開けたところを通りエ軍は海の真只中で再び起つた波に全軍のみこまれる、といった話 (*Illustrated Guide to the Bible*, edit. by J.K.Poter, Oxford Univ. Press, 1995) 等と同じの範疇に属すると明確化することである。その点古事記の記述は直接的で素朴である。これをもととして考えればよい。

其大后、息長帯日賣命は、當時神帰りたまへりき。故天皇筑紫の訶志比宮に坐しまして、熊曾国を撃けたまはむとせし時に、天皇御琴を控かして、武内宿禰大臣、沙庭に居て、神の命を請奉りき。是に大后帰神して、言教へ覺語したまひつらくは、西の方に国あり、金銀を本めて、目の火耀く種々の珍宝、其の国に多なるを、吾今其国を帰賜はむと詔りたまひき。爾に天皇答向したまはく、高き地に登りて、西の方を見れば、国土は見えず、唯

大海のみこそ有れとまをして——御琴を押退けて、控きたまはず黙坐しぬ。——即火を擧げて見まつれば、既に崩訖りましにき。(中略)

爾建内宿禰恐し我が大神、其神の御腹に坐す御子い、何の御子ぞと白せば、男子ぞと答詔たまひき。爾具に請ひまつりけらく、今此く言教へたまふ大神は、其御名を知らまほしと白せば——是は天照大神の御心なり。亦底筒男、中筒男、上筒男三柱大神なり。——我御魂を船上に坐せて、眞木灰を瓠に納れ、亦箸と平手を多に作りて、皆に大海に散浮けて、度ります可しと詔りたまひき。

故備に教覺したまへる如くして、軍を整へ、船を雙めて、度幸ます時に、海原の魚ども大なる小き、悉に御船を負ひて渡りき。爾に順風大に起きて、御船浪の従にゆきつ。故其御船の波瀾、新羅の国に押騰いて、既に国半まで至りき。是に其国主、畏惶みて奏言しけらく、今より以後、天皇の命の隨に、御馬甘と為て、毎年に船雙めて、船腹乾さず、船楫乾さず、天地の共、無退に仕奉らむとまをしき。故是を以て、新羅国をば、御馬甘と定めたまひ、百済国をば渡屯と定めたまひき。爾に其御杖を、新羅国主の門に衝立てたまひき。即ち墨江大神の荒御魂を、国守ります神と、祭鎮りて、還渡りましき。

右が古事記の神功皇后にまつわる記述である。日本の大正小学教科書の神功皇后記述はこれに日本書紀のそれを加えて作製されたものである。その点教科書は、記紀の神功皇后記述を忠実に収録している。

神功皇后の物語りについては、これを日本民族主義昂揚の為そこに虚偽説をたて、日本民族の願望をその虚偽の上にもりこんだものと解釈すると共にその物語りの土台となった白村江の敗戦に至る眞実の朝鮮中日朝鮮半島戦争史を明らかにする事である。神功皇后三韓征伐が全くの作為に基く虚偽の説話であることを明確化することが必要である。

これなくしては、日本人の心に何千年住みついてきたその植民地主義指向の心ばえを打消すことは出来ない。植民地主義は先述の如く一九四五年まで何千年世界を支配してきたそしてそれが払拭される為には人類は第一、第二世界大戦と未曾有の大災厄を経験しなければならなかったもので、その抹殺のためには、あらゆる努力が払はれねばならない。神功皇后説話を修正するのは、この為にもまた甚だしき必要性をもっていることを忘れるべきではない。『古事記』、塚本哲三編、有朋堂書店、大正七年七月刊。『日本書紀』（二）、岩波文庫、一九九四年一〇月刊。『好太王碑と任那日本府』、李進熙、学生社、昭和五二年一〇月刊。『任那と日本』、金廷鶴、小学館、一九七七年一〇月刊。『伽耶国と倭地』伊錫暁著、兼川晋訳、新泉社、一九九三年一〇月刊。『日本海外発展史』西村眞次、東京堂、一九四二年。『日本古代の神話と歴史』米沢康、吉川弘文館、一九九三年。『日本古代史講義』笹山晴生、東京大学出版部、一九九二年。『ヤマト王権の謎をとく』塚口義信、中央公論社、一九九三年。『古代倭王朝論』畑井弘、三一書房、一九九七年。『古代史の鍵・対馬』永留久志、一九七五年。『邪馬台国論考、一・二・三』橋本増吉、東洋文庫、一九九七年。

第三章 桃太郎

桃太郎お伽噺

神功皇后の三韓征伐のお伽噺版として我々は桃太郎の説話を見出す。それは桃太郎が、犬猿雉を引つれて鬼ヶ島へ

鬼退治に出掛け、鬼の王様をはじめ多くの鬼をやっつけて彼等の財宝をすべて奪いとり、これを車に積んで凱旋するというものである。これはお伽噺として室町時代につくられたというが、神功皇后が八十八艘の船に金銀珊瑚綾錦を満載して凱旋するのとよく似た話である。いまその典型的と思はれる物語りの筋をのべると次の如くである。

なんと昔があつたそう。あるところにおじいさんとおばあさんがおつたそう。おじいさんは、山へ木を切りに、おばあさんは、川へ洗濯に行つたそう。おばあさんが洗濯しとつたら、川上のほうから大きな桃が、ドンブリ コンブリ スッコンゴ、ドンブリ コンブリ スッコンゴ、と流れてきた。——そいつをすくうて、持って帰つて切ろうとした。

そしたら桃がぼかつと割れて、中から元気な男の子が「オギヤア、オギヤア」と、泣きながら出てきたそう。——「おやまあ、おじいさん、男の子が出てきた」「うれしいのう、おばあさん、桃から生れたんじゃけん、桃太郎いう名をつけよう」言うて二人とも大喜びじゃ。「桃太郎や、桃太郎や」言うて、ごちそうをたべさせたそう。桃太郎は「いよいよと背がのびて大きな男になつたそう。——友達が来たら、腰を上げて山へいったそう。——そうして大きな木をゴイツと引き抜き、根も切らず、葉も落とさず、そのまま、ギツシ、ギツシと担いで戻つたそう。——殿様が、その音を聞いて「そういう元気な者がおるんなら鬼ヶ島へ鬼退治に行かそう」そういうことになつたそう。おじいさんとおばあさんは、白をゴーリン、ゴーリンひいて、大きなきび団子をこしらえてやつた。桃太郎がきび団子を腰に結びつけて行きようとしたところが、犬が出てきた。

「桃太郎さん桃太郎さん。どこえゆきなさるかな」「鬼ヶ島へ鬼退治に行く」「お腰のものは、なんでござりやあ」「やあこれは、日本一のきび団子よ」「そんなら一つくださいな。お供をします」「一つはやれん。半分やる」

犬は半分もろうて食べて、ついて行ったそう。—— 猿も半分もろうて食べてついて行ったそう。そうしたら、今度は雉が出てきた。雉もきび団子を半分もろうて食べた。桃太郎は、犬と猿と雉をつれて、勇んで行ったそう。

鬼ヶ島へ行ってみたら、鬼は、門をびーやんと閉めてしもうて入らせん。そこで、雉がばあつと飛び立って門を内側から開けたそう。 「さあいけえ」 犬も入るし、猿も入る。桃太郎も続いて入って、奥の方にいる鬼どもを見つけた。みんな日本一のきび団子を食べたおるから、元気がよい。犬は鬼の足に食いつく。鬼が犬をやつつけようとすると、猿が飛びついて引っかく。往生した鬼は、とうとう「どうぞ、命だけは助けてください。鬼の宝物は、全部あげますけん」と、わびを言うた。「よし許してやろう」 桃太郎は、鬼の宝物をもろうて、みんなで車の前を引っぱったり、後ろから押したりして戻ったそう。

昔こつぱり、にやんこの目（再話、稲田和子さん、採録場所、川上郡、阿哲郡、「おかやま、桃太郎伝説の謎」山陽新聞編、一九九五年）。

これが戦前迄の典型的な桃太郎説話であった。室町期以降これは口伝で語られたというが江戸時代に印刷技術が発達して所謂赤本、黒本、黄表紙等が盛んに出版される様になり、桃太郎語りも赤本をはじめ多くの本に印刷される様になった。この右掲の桃太郎断は江戸期印刷のものという。太平洋戦前迄の桃太郎説話に共通のメルクマールは、①桃から生れた桃太郎。②鬼ヶ島征伐にゆくのにきび団子を作ってもらう。③犬猿雉がきび団子をもらってお供になり、鬼退治についてゆく。④鬼を打こらしてその宝物を奪い、車につんで戻ってゆく。

右の様である。この場合、桃は桃源郷という風な仙境やまた劉備玄德、雲長関羽、翼徳張飛三名の桃園の誓いといっ

た言葉に代表される様な神秘ですがすがしい雰囲気をもった果実と考えられる。こういう桃太郎が柿太郎や、西瓜太郎では様にならない。神功皇后がすべて神の啓示に従ってたち、行動し、任務を果す様に桃太郎はその出生に人間のいやしい営みとは無関係な「処女懐胎」の如き神秘性を附與されたと考えるべきである。大猿雉は智仁勇の表象とも考えられるし、一つヒネツテはやきこと風の如く、静かなこと林の如く、侵掠すること火の如く、動かざること山の如し、という表象と考えてもよからう。

桃太郎と世界植民地主義

神功皇后説話の盛んなるはいままた如くであるが、この桃太郎斬も日本全国津々浦々へ広まった。他国を侵畧し、ぬれ手で粟のつかみ捕りで金宝を奪いとつてくるというのは、主説、子供譚双方とも日本人の心性にびったり合つたのであろう。しかしこういつた植民地主義は何も日本に限らない。全世界的なものである。当今流行の言葉で言うならば植民地心性のグローバリズムである。スペインやポルトガルは一五世紀法王裁定で世界を両分し、夫々の地域を植民地化することに懸命の努力を傾注した。そうして南北アメリカ、アフリカ、インド、東南アジア、フィリピンに彼等の植民地化が進んだ。そのとき彼等のかかげた大旆はキリスト教の宣布であった。未開蒙昧の無智の闇に生きる人々にキリストの福音を授けて彼等の魂を救う、というものであった。十字軍のときもそうであった。そこに彼等の正義があつた。果さなければならぬ義務があつた。こうして世界征服が進み、植民地化が完成された。植民地化された人々の苦衷と犠牲は世界征服の美酒の前にももの数ではなかつた。

日本にその波が及んできたとき、ザビエル、トルレス、ルイス・フロイス、ワリニヤ二等、大いに日本にキリスト教を広めようとして努力した。そして日本の宗教、神道、特に仏教を多数の金属や石を偶像として崇拜する淫祠邪教とした。彼等は一神教であるキリスト教の教義上かかる異端の存在を許すことは金輪際出来なかつた。明治政権になつて、徳川時代の神仏基三教の衝突を幕府白日の悪業たるキリスト教弾圧史として暴くことに急なる人々の一団が現れて明治政権輔翼の精神的一端を強力になつた。

神功皇后や桃太郎の説話はずい分古く前者は神代、後者でも一四世紀、後醍醐帝や足利尊氏の時代から行われた。桃太郎は神の啓示で動くとか宗教宣布の目的をもつた人格ではなく、何となく神仙談的背景をもつてスツピンで鬼ヶ島へ乗りこんで宝を奪うという最も現実的でリアルな短刀直入の征服者である。

それだけに全国に広まって類似の桃太郎談も種々出たけれど、先にのべた四つのメルクマールだけはどの話にもつている。何度もういが、ここに神功皇后や桃太郎伝説の日本人の嗜好にかなう秘密がひそんでいる。しかしその植民地主義心情は今いった如く古くから世界的なもので、これをこれら説話にして大層わかりやすいかたちにしたのは日本だけである。そこに日本人の朝鮮中侵襲に対する特異な思い入れがある。

昔桃太郎発端話説 山東京伝

江戸時代寛政期に右題の物語りが黄表紙にあらはれた。これは何故桃太郎が鬼ヶ島へ討入らねばならなかつたかの理由をあげつらう説話となつてゐる。話は、飼鳥を商いて世渡りとする正直老人夫婦とその隣りの悪い婆様の話が軸

になつて宇治拾遺の実方雀の話がからまる。実方中將は勅勘を蒙つて流浪し、悪い婆様のところへ食を乞うて追払はれ正直老夫婦に背戸になつた桃を與へられる。そのアトで卿は道に死し、その一念が雀となる。それから舌切り雀の話でよい老夫婦が雀のお宿で色々宝物をさずかる。悪いばあ様は重い大きいつづらをもつたら化物がぞろぞろ出たとつづき、正直老夫婦は裕福となつて商売をやめ飼つていた犬猿雉をはなつというが三者共に別れを惜しんで居残ることになつた。悪いばあ様は鬼ヶ島の鬼共につげ口してよい老夫婦が宝物をもらつて大金持になつたと言いつける。そこで鬼共と悪いばあ様は正直老夫婦の家へしのびこんで隠笠、隠蓑、打出の小槌、錦の巻物、金銀、米錢を奪つて鬼ヶ島へ立帰つた。悪いばあ様はそのとき悪業がたつたつて犬に喰ひ殺されてしまつた。正直老夫婦は宝物をとられて一ぺんにもとの貧乏暮らしに戻つた。その夢に実方朝臣あらはれて、老夫婦に桃をもらつて飢をしのいだことを言い、いまその桃を返すが、そこから一子あらはれて抜群の力量をもつて鬼ヶ島にいたる、と告げ、犬猿雉共に恩を報いて従いゆく、と言うや、身は忽ち数万の雀と化して天空に飛び去つた。

昔々あつたとき。爺は山へ草刈りに、婆は川へ洗濯に、川より流れて来る桃に、若やく夫婦の中に儲けし桃太郎は、子供衆御存じの鬼ヶ島、犬猿雉が忠臣話、忠は雀の音に残り、桃の中なる実方に、みみをとつたる花の春、お子様方のお睡氣覺しねむけあまし、やんら目出度の市が榮えた、とある。(日本名著全集、第十一卷、黄表紙廿五種、大正十五年)

ここで注意を引くのは、桃太郎鬼ヶ島攻畧の理由がのべられると共に、桃を食べて老夫婦が若やいで一子を儲けたと言ひ、神仙談や桃の神秘をあつさり打けて合理的なりアリズムが開陳されていることである。江戸時代の合理性であろうか。尚興味あるのは、桃太郎と犬猿雉の話はお子様方すでに充分御承知という文言のみえることで桃太郎噺がいかに広く巷間に流布していたかを示す一つの好例であると思ふことである。桃はおいしいし、犬猿雉はお子様

方にとつては無二の伴侶であったことは何時の時代も変りはない。同時代の南総里見八犬伝も猛犬八房の胎内から流れ出た犬という字のついた八個の水晶玉が発端となつて話が組立てられているのも思い起される。

桃太郎主義の教育

こうして桃太郎譚の盛行と共に桃太郎の名は全国津々浦々にひろがつて桃太郎といえは誰知らぬものもなくなつた。ここに日本人の侵略主義のルーツといえは大袈裟かも知れないが、桃太郎は若者になつて鬼ヶ島を征伐し、宝物を奪つて帰つた立派な人物といふことになつて、これが神功皇后物語と共に日本人の朝韓中侵略利得のあこがれとなつた。このことは否定出来ない。

山東京伝の時代、既にそうであつた桃太郎は明治、大正と益々その名を輝かす。それはもとより日本も明治政権となつて帝国植民地主義国家となつた為で、日本三太郎の足柄山の金太郎、浦島太郎の中でも一段際だつてすぐれた存在感をもつ様になつた。それは帝国主義国家となつた日本が、富国強兵策の根幹として強く智仁勇をそなえた立派な若者として桃太郎像が必要であつたからである。

その典型的と思はれる教説があつて、それは巖谷季雄（岩谷小波）の「桃太郎主義の教育」（大正四年二月刊）である。この書物は第一次世界大戦下の日本の外交的立場を論じ日本はかつては中国をへこまし、ロシアを撃ち、こんどはドイツをたたいたが、この場合は、それは英仏露の尻馬にのつて強敵ドイツをこらしたのであつて独自の勝利ではない、と喝破し、同盟協商というも所詮は利益の離合集散であることを忘れてはいけぬ。恐ろしいのは樹の上で

説 高見の見物をきめこんでいる（米國參戰前）アメリカであると言ひ、この國は五、六十年前は、日本の手をとつて指導してくれた恩人であるが、日本が一人歩きする様になるとこれをそうさせまいとし出した。色々妨害を講じる。現に、排日問題はゆるがせに出来ない。こうした近未來の國際的動きに吝であつてはならない、と主張して桃太郎主義の強い子、青年を作る様に教育を改変しなければならぬ。青白い弱い秀才は不要である、と喝破するのである。憂國の、日本國民よ聞け、といった類の本である。フイテの「ドイツ國民に告ぐ」日本版であろうか。

桃太郎譚から、舌切り雀、カチカチ山、花咲爺、猿かに合戦等々、赤穂浪士、項羽、劉邦、宋襄の仁、忠君愛國何でも組上りにのせて桃太郎主義の教育の観点からバツサバツサと切りまくるのである。色々あるが結論はこうである。

「元來日本の國民性は、發展的のものであつた。進取的のものであつた。それが儒教仏教を経とし、封建制度と武士道とを緯とした姑息な古布に包まれ、その本來の活力を束縛されたのが、ここ五十年前までの日本の有様であつた。然し今はその上包みは、全く除かれた時代である。若しそれが幾分でも残っているなら、速かに破り去るべき時代である。そして眞の國民性を遺憾なく發揮した、活力ある新日本を造らねばならぬ。そしてその本來の國民を教育するには、この桃太郎なるお伽噺が、最も適當な教材である事を僕は幾度も繰返して憚らず、そして家庭にも学校にも、飽くまで之を推薦したい。

彼の老いてますます壯なる爺さん婆さん、貧に処して少しも僻まず、欲はあつて而も食らず、働いて骨を惜しまぬ老人夫婦の下に、腕白ながら、乱暴でなく、直情径行にして無邪氣な一人子。大膽にして細心な、勇壯にして而も慈悲あり、公平にして寛大な名將の下に、真摯にして誠忠な、智仁勇の各個性を發揮して、而も団結力ある士卒。一として模範的ならぬはない。

中畧

こう言えばと言つて僕は何も桃太郎の様に、何でも外国を征伐しろと、冒険的思想を奨励したいのではない。只飽くまでもこの精神の進取的に速大な所をとるのだ。これも念の為に断つておく。」

こうして岩谷小波は大いに桃太郎主義の教育の必要な事とその実践のすすめをとくのである。これは外国侵畧をすすめるものではないと断つておられるけれど、この書物全篇は日本の立場を論じて国際的危険を予見してそれへの対応としての教育をとっているのです。政府の富国強兵策に迎合した所論であることは勿論言をまたない。この断りは絵を赤くぬって絵具は赤色でない、といっているのと同断である。

しかも更にこの論は桃太郎の銅像を子供の眼のふれるところ、即ち遊園地にたて、桃太郎精神の涵養につとめたいと説き、はては桃太郎神社（現在大山市と岡山市にある）の建立までも提言している。非常に力強い所論とその実践のすすめで、政府一辺倒の迎合文学であると言はねばならないであろう。

桃太郎はまた民話、お伽噺研究の眞面目な科学的対象となる榮譽もになった。昭和に入つて八年一月一日に「桃太郎の誕生」という桃太郎譚ルーツの研究が出た（柳田国男著、三省堂刊）大部なものである。こうなると桃太郎も性格の幅、貫禄共に優たるものになったと言はざるを得ない。これは昔話成長の三つの変化をとき、一、説話が上代に於て夙く芸術化し、そのやや成熟した形に於て広く流伝して居たもの、たとえば死人感謝譚や紅血缺血話、二、説話の信仰上の基礎が全く崩壊せず、従つて之を支持した伝説は素より、その正式の語りごとが尚幽かながら残つて居たもの、たとえば蛇舁入の如き一部の異類求婚譚、三、最後に説話が近世に入つて急に成熟し、元の樹の所在は不明になったが、まだその果実の新鮮味を失はぬもの、たとえば桃太郎、瓜子姫説話の類、とした。

説

こうした分類を日本の諸々の民話お伽噺に当はめて、また外国のそれらにも当はめ、その比較、影響、類似性、異質性等様々な要因をもつて出来る限りそれらの解明を行い桃太郎譚の出来た経緯と性格を考証しようとした。シンデレラやグリム童話の灰かつき姫、ドイツの千枚皮、フランスの驢馬の皮、英国の猫の皮、欧州の古風なる死人感謝譚などを日本の民話お伽噺などと比較している。日本の民話は主軸の百近い話を分析してこの必要にみてようとも試みている。

桃太郎について一ついっておくとそのおとも大猿雉が桃太郎をたすけるという動物援助物語を三蔵法師の孫悟空、猪八戒、河童の沙悟淨等と比較し、またローマのミトラ神の石像をひいて猛牛を退治する少年を援けているのが犬と蝸であることを考証している。尚桃太郎が川上から流れてきた桃から生れたという話は、近い地域にも其類似のものが発見せられていない全く日本独自の出現と規定もしている。

明治以降桃太郎の人気の高いことは抜群で桃太郎という名前でいろいろな研究や主張が出て、日本の桃太郎は日本太郎そのものとなった感が深い。

第四章 排外思想といじめ

山田の案山子

神功皇后説話と桃太郎譚はいまみてきた様に表裏一体をなし、明治政権以降の日本による朝鮮中侵畧のルーツであった。こうした侵畧心情は、当然他国人に対する蔑視、排外思想を含んでいる。それと共にこうした心情は対外的に働くだけでなく自然に對内的にも働く。對内的に人を尊重する精神に欠けているから對外的に他国人を排斥する心ばえとなるのかも知れない。両々相ままつている。

これは日本だけに限つたことではないし、人権尊重の立場からすると世界的に各地域様々な問題をかかえて今日、国連に於ても世界人権宣言や国際人権規約等でその是正が強くはかられているし、国連人権委員会等も具体的に種々の活動をひろげていることは衆知のところである。對外的對内的な人権無視の風潮を根絶することが人類の大きな責務である。

日本に於ては神功皇后説話や桃太郎譚が盛行していたころは日本女性に準禁治産者の中にくみ入れられて法律的責任能力が欠如していた。またひとつころは姦通罪も女性にだけ課されるといった現象があり、早い話がその字は女から構成されているのである。女性はルナチック扱いという保護を受けていたのである。

遊びでも「お山の大将おれ一人」といったものがあつたが、一寸非道いのは左の唱歌であつた。

山田の案山子

山田の中の一本足の案山子

天氣がよいのに蓑の笠つけて

朝から晩までただ立ちどおし

歩けないのか山田の案山子

それからこれは鴉にカアカアと嘯われるという風につづく。今思い出して書いてみるとまことにうしろめたい気がする。しかし当時は何とも思はなかつたし、平気で当然のこととして歌っていた。こちらの子供であつたというのは大した言い訳にもならない。とに角これは色々に解釈しようと思えば可能であるが、非健常者をみんなであざけつて笑ひ者になっているという感じが強い。弱者、愚者をこうした対象にする非道が日本でまかり通つていた。

釣女

歌舞伎十八番に「三人片輪」「釣女」という人権無視のだしものがあつた。前者は三人の非健常者を舞台上に上して、色々身体的特徴からの仕草をさせ、観客の爆笑を誘うというもので、最後はお互いが足らざるを補ひあつて面白可笑しくひっこんでゆくというものである。これも「山田の案山子」と同巧異曲の弱者蔑視のあらはれである。

「釣女」というのも美人とそうでない人を舞台にのぼせてみんなで笑おうというもので、セクハラというもおろかな大型の女性蔑視の標本の様なものであつた。

殿様がえびす三郎に願をかけて釣竿をふると、絶世の美女が釣にかかり、二人は目出度三々九度の盃をあげるところ、お伴の太郎冠者が、真似をして釣竿をふる。釣るものは何々。鯛に鯉に恵方棚に撞き鐘。と竿を上げると、被衣かつぎ目深にかつぎし女。アラ尊や、かかつたわ、かかつたわ。サアサア此方へ御座れ、嬉しや嬉しや。サアサア是からは三三九度の盃じゃ。これへござれ。何も恥かしい事はない。そなたと夫婦めおとになるならば、春は花見、夏は涼み、秋は月見の酒盛に、冬は雪見のちんちん鴨、天に在らば比翼の鳥、地に又在らば連理の枝、必ずそもじは変わるまいな。悪女へ何の変つてよいものかいな。先づ何はともあれ御面像を。被衣こを除れば這は如何に、河豚に等し

き醜女ゆゑ、ヤア、和御寮は鬼か、妖怪か、なら消えてなくなれなくなれ。なうなう我が夫、今仰有つた楽しみは、嬉しうて嬉しうて、わたしは忘れはせぬわいなア、となつて女性は太郎冠者にとりすがる。太郎冠者は逃げようとすが殿様に「ヤイ太郎冠者、三郎殿の授けたまいし妻ぢやによつて否應いやおうはなるまいぞ、と叱られ、何はともあれ目出度う舞おうではないか、と殿様が言い、主従が舞台中央で美しい舞をみせ、「笑い興ぜし能舞台、鏡の松の常磐津に、昔にかへる岸沢の、波の鼓の打ち寄りて、睦じかりける次第なり、とヤンヤヤンヤの舞いおさめ」となつたものである。

こういう演しものが何の疑もなく上演されていた。今から思えば大変な時代であつたとなるが、それだけ現在は何事もすべて長足に變つてきたと言ふことは言える。こうした「山田の案山子」や「釣女」等の思想精神構造は、神功皇后説話や桃太郎譚と表裏一体をなすもので対外的対内的他者蔑視の土壌であると言へる。こういった考え方は現在では地を払つた様にみえるが、たしかに人々の言葉は一八〇度變つたといえるが、實際面で行動は中々かはらない。今日すこしもおとろへないのは、いじめの問題で、益々さかんになる傾向さえある。こうした傾向はそのルーツに「山田の案山子」的発想をもつてゐることは疑いない。まづ日本人の心の中に存在し、今では心奥にひそんでしまつたものを、くさいものにはふたをの考えでなく、正面からとりあげ、とりくんでそういったものを払拭しなければならぬ。日本人は（一）大衆的自発的行動には無縁である。（二）支配され抑圧されている觀念が強く長いものにまかれるのである。（三）權威に弱く、これに常にあこがれ、貴種の指令を待つてゐる、といった欠点が強。しかしひるがえつてみれば、日本人の市民社会の發展は世界に冠たるものがあり、どの国家国民の追隨も許さぬものがある。知識欲は旺盛で、勤勉、勤勞を尊び、技術の修得はす早い。日本市民社会の勝れた点は多々ある。これらを自覺し、対

説 外的対内的他者蔑視の風潮を疫除していじめの根絶をはからねばならない。これがまた対外的他者蔑視の風潮の眞底に於ける払拭にもつながるのである。

論

第五章 むすび

神功皇后説話

神功皇后説話と桃太郎譚をしらべてきた。西郷隆盛については、本学法学研究所紀要28号に取扱ったので、ここでは割愛する。神功皇后については、先にのべた如くその世界的位置づけと意義を鮮明にしてその三韓征伐譚が全く架空のものであり、それは白村江敗戦から立上る為に編まれた記紀が、日本精神の民族主義的昂揚の為に作り出した幻の女傑像であった事を歴史的に明確にする必要がある。

これは時代は下るが、一八四〇年代フランスに於てナポレオン三世 (Napoleon III) 出現の前夜、ナポレオン一世覆滅後の敗辱感を漸く払拭する一大機運が起り、フランス民族主義の勃興となったとき、これを先どりする「フランスの執政政治と帝国」(Histoire du Consulat et de L'empire par Louis Thiers, 1845)、「シロンド党の歴史」(Histoire des Girondins par Lamartine, 1847) 等があらはれて共和国の使命感を高調すると共に大いにナポレオン一世の業績をたたえた「レピュブリク」が出来る。(The French Revolution, by A. Goodwin, Hutchinson Univ. Press, reprinted 1968)

但しこれらは近代のことであり、歴史も史実に基いたものであった事は幻の女王神功皇后の三韓征伐像と異るところである。

桃太郎譚と忠臣蔵

桃太郎については、そのお伽斬性を否定して鬼ヶ島退治のイメージを更改しようとする試みが色々なされていることは興味深い。これも神功皇后の虚像破壊と共に色々考究しなければならないであろう。例えば桃太郎伝説は実在の人物四道將軍の一人であった吉備津彦命の鬼神「温羅」退治の話を脚色したものだという主張がある。この吉備津彦命も古事記、日本書紀に登場する人物であって実在した人物であるからそこに何となく真憑性がただよう様である「おかやま、桃太郎伝説の謎」前掲書）。つまり桃太郎の船にのってゆく鬼ヶ島なる朝鮮攻畧は無根の幻想であるということである。この他に高松市の鬼無瀬にある鬼無権現の縁起が桃太郎伝説のものであるという説もあり、犬山市の桃太郎神社の古代縁起の話もある。更に桃太郎は実在の福武三郎兵衛元信であるが、その四代前の兎玉対馬守三郎右衛門は毛利元就の巖島合戦の総指揮官であった、という桃太郎実在説もある（「桃太郎は吉備国に実在した」福武一郎著、昭和六一年刊）。

尚更に激しい桃太郎譚更改の動きがある。これはすさまじいもので、戦后お伽話集、民話集の出版物から桃太郎が一せいに消えてしまったことである。これは結論から考えるとこういった消去によって桃太郎の侵畧性がかえって明

確化され、またそれがこういった行動によって内奥で桃太郎鬼が島征伐が、日本の人々の心の奥に押しこめられて生き残ることになったと考えられる。ベストセラーにしたくば発禁処分にすればよいという俗説は人間のこわいものみたさの心情をくすぐって信頼性が高い。桃太郎譚は文部省次官通達「終戦に伴う教科書取扱方に関する件」で教科書から消えることになったあふりでのこのお伽話から桃太郎が一せいに撤退したと考えられるのであろう。当時GHQと次官通達の政治的關係は如何なるものであったのであろうか。これで日本の教科書はすべて戦犯関係の箇所、国防軍備、戦意高揚、外国のひぼう等軍国主義にかかはる文章や條項はすべて削除、もしくは抹殺となったのだが、果してその実行はどの様なGHQとの関係で行はれたのだろうか。これがアイより出でてアイより濃しという結果とならなかったかをおそれる。

しかし神功皇后譚も教科書からは削除されたが、その大もとの古事記、日本書紀は何の戦犯條項にも問はれていない。また終戦直后忠臣蔵の上演が禁止となって歌舞伎関係者やファンは大いにガッカリし、GHQさんはどうなっているんかいなの声が高かったが、これは間もなく復活して再びお輕勘平が櫻の枝をふって舞台で大立回りをすることとなった。大体忠臣蔵という芝居を日本人の復讐心をそそるなどと定義したのは誰なのだろう。この歌舞伎の独参湯といはれた名作（假名手本忠臣蔵・竹田出雲・並木千柳等作、寛延元年・一七四八年。同巧異曲の忠臣蔵戯曲は江戸時代、元禄以降数多い）は、高師直が内匠頭の正室顔世（顔のよいというイミ）御前に道ならぬ恋をしかけ彼女から

～さなきだに重きが上の小夜衣

つまある上につまな重ねそ

と肘鉄砲を喰はされたことから復讐譚が展開するのであり、いはば前出トロイがギリシャのヘレンという絶世の美女を盗み出したことから大戦争が起る話と同じ様なものである。

桃太郎鬼が鳥征伐譚がそのままであるのはよくないがさりとてこの様な形でこれを抹殺することは余計かえってよくないと考えられる。文化と歴史と政治はよくよく慎重に取扱はねばならない。何度ものべる様に神功皇后の物語りを正鵠にもどしてその意義を明確にする事から桃太郎譚もその征伐性を否定しなければならぬ。お伽噺であるから眞も偽も本来ないのだといってしまえばそれまでだが、これが神功皇后の物語りと表裏一体をなすその子供向けの宣伝物語りだ、ということをも桃太郎譚を正面から見すえて判別出来る様に明確化しなければならない。これが桃太郎譚についてやらなければならないことである。その意味で山陽新聞その他が桃太郎の謎ときとして種々の眞実性ある物語りの掘起しを試みているのは正しいし、その意味で効果的である。その掘りおこしたストーリーが正しいかどうかは別として、その事を問題にすることが大いに桃太郎の侵畧性を否定し、ひいて日本人の侵畧心ばえをただすことになるのである。

附記

右が大事なことだが、更にここに今一つ興味があるのは、桃太郎譚の別種のものがあることである。戦後お伽噺や民話の一切の本から桃太郎の噺が消えてしまったのだけれど、別種のそれは本来の桃太郎譚と猿蟹合戦をつなぎあはした物語りである。即ちオジイサン、オバアサンの話、桃が流れてきて桃太郎が生れて大きくなつて鬼を退治にゆくというのは桃太郎譚そのままである。しかしこの桃太郎は鬼ヶ島へゆくのでなく鬼の家へゆくのであり、鬼も一匹だけである。そしてここから猿蟹合戦の物語りとなる。即ち桃太郎についてゆくのは、牛ぐそ、ひき臼、鉄砲玉、か

説

論

に、そして蜂である。みんなが鬼の家についてからが物語りは猿蟹合戦のそれとなって、猿が鬼に代るだけである。猿は蟹をだまして柿をなげてこれを殺した為仇討ちされる。鬼の場合はそういう事実はなくてやられるのである。桃太郎一同が鬼の家につくと鬼は留守であったので、夫々が持場持場へかくれる。鬼がかえってくる。お茶をのもうとして水かめのふたをとつたら蜂が出て目を刺す。そして鉄砲玉がドーンと出て目をくりぬいた。鬼はおどろいたが、まアぬかみそをねぶろうとしたらかにか手が切った。逃げようとして敷居のかけから牛ぐそがそろつと出てすべつてころんで、そこへ二階からひき臼がドスンと落ちて鬼は死んでもうた、となる。

そして倉をあげたら宝物が一杯あつたのでそれをもって帰つた、ということになるのである。(『日本の民話』⑨、山陽、編著、稲田和子、立石憲利、ぎょうせい出版、昭和五五年。)

こういう桃太郎譚も正調のそれと違って興味がある。桃太郎の征伐譚を消すのにいい。こういうのがあれば、色々発掘されると面白いと思う。

この論稿の成るに当たつて、奈良教育大学、金澤大学、北海道学芸大学、同岩見沢分校、文教大学越谷図書館、梅花女子大学等より貴重な図書、文献の借覧を許された。ここに誌して厚く感謝の意を表したい。